

人物風土記・・・



・・・眞中すず氏

明治十四年十一月三十日生れだから、満六十九歳と八カ月。学生時代東京の下宿先にあつて克苦徒歩通学によつてよく青雲の志を果たし、女医の資格をとつた。明治の女学生時代から職業婦人として社会に進出する志を立てたという

本縣職婦人の先覚者だともいえる。

結婚し家庭をもち幼児をかへるようになってからも、職業を捨てなかつた。眞中さんの過去は、泣く子供をふりきつて往診に行かねばならなかつた若き日の母の姿であり、この思出がいまでも深い感動になつてゐる。

会合などに出てもハデな発言はしない。しかし諄々と説く言葉のうち、養つてきた烈々の闘志が齡と共に円熟してそのまゝきようの眞中さんの風格となり、一貫した人柄をかたちづつたという感じである。思想とはもともこのようにその人の身についた志操と一致するものであらう。群馬縣女

医会長、口赤奉仕團前橋委員長、二之沢愛育莊理事長、群馬縣家庭授産事業資金貸付審査委員、群馬縣兒童福祉審議会委員、群馬縣母子会委員長、群馬縣母子保護連盟委員長、前橋母子会委員長、家事調停委員など、公私全く多忙というかたちである。

家庭にあるときは針仕事もする家にばかり閉じこもつていたら普通のお婆さんのように老人臭くなり「老人の日」を恋しがる年齢であるが、会つてみると不思議に老人臭いところがない。シヤンとした批評眼をもち人を見る眼も甘くない。眞中さんに課せられた社会的役割、それは薄倖な末亡人の人生を明朗に健全にみちびいてゆく燈台だらう。

2 群馬の女性医師の先駆け 眞中すず

昭和 26 年 (1951)

前橋市で最初の女性医師です。産婆試験に合格後に済生学舎及び日本医学専門学校で学び、試験に合格して医師となりました。1男4女を育てながら医師を続け、女性の地位向上や各種の社会福祉事業にも尽力しました。

戦後は上毛かるた作成の中心となった浦野匡彦^{まさひこ}とともに戦争で夫や父を失った母子の福祉運動に力を入れました。

写真は戦争による遺族・障害者などの戦争犠牲者を支援する群馬県更生団体協議会が発行した「たすけあい」で紹介された眞中氏の紹介記事です。

西片恭子家文書『たすけあい 第13号』(P01506 156-16)